

校友会 あのころ・そして・いま

校友インタビュー
あのころそしていま 32

数多くの作詞、本を出されているムトーさん。
ご自宅にてゆったりとした時間の中、
「勘違い」だらけの人生のお話を楽しくお伺いできました。

自分で大金持ちだと思えるのは
財産としての友達がいたから

作家・作詞家

ヒロコ・ムトーさん
(相澤 紘子)

(1968年文学部フランス文学科卒)



■プロフィール	1968年 青山学院大学文学部フランス文学科卒業	1979年 帰国。ミュージカルの原作、脚本、作詞、著作など幅広い分野で活躍
	1968年 TBSテレビ制作部タイムキーパーとして勤務	2007年 朗読講演「心の宅急便」各学校で開催
	1969年 いずみたく氏主宰のオールスタッフ・プロダクションに作詞家として所属	(受賞歴)
	「古賀政男賞」入賞曲など多数作詞	1970年 古賀政男賞
	1976年 渡米	2009年 神奈川県ボランティア活動奨励賞

—青学時代はどのような学生でしたか。

私には10歳年上の姉がいて、『週刊女性自身』創刊2号から8年間、「小さな恋人」という漫画を連載していました。1960年代一世を風靡する女流漫画家トシコ・ムトーとして活躍していました。ちょうど私が中学2年生の時、それまで平凡なOLだった姉が見る見るうちに輝いて美しくなっていく姿を憧れと同時に誇らしく感じていました。私も姉のように、自分の何かを生かして生きていく人間になりたいと。それをずっと探していたのが大学時代でした。

青学の仏文科に入り、心ひそかに翻訳家になりたいと思ったりもしていました。当時、大学を卒業して女子が就職するにはコネがないと受験することさえできなかった。青学が誇るESSIに入って英語がうまくなれば外資系の会社でも受けられるかと思っていましたが、それが大いなる勘違いの始まりでした。始めてしばらくしないうちに、自分には語学の才能が一切ないと分かりました(笑)。ESSIに入部したら周りじゅう、宇宙人みたいにペーラペーラと英語をしゃべれる人ばかり! 大阪の府立高校で英語はいい点数を取っていたので英語が得意と思っていた自信は粉々に砕け散ってしまいました(笑)。落ちこぼれESS部員の私は1年も待たずに退部しましたが、半世紀以上経った今も私を支えてくれている親しい友人の多くはESSで出会った先輩同輩たち。「君には他人が持っていない何かがある」と励まし続けてくれました。その中の一人が13年前に他界した主人です。

—就職はどうされたのでしょうか。

卒業の年になり就職活動に入りましたが、コネも語学も成績もなく、当時は女子大生を公募しているのは航空会社と出版社とテレビ局&ラジオ局だけ。マスコミ志望でしたが、出版社は姉が同じ業界に入ってきてほしくないと言うので、受けられる限りのテレビ局&ラジオ局を受け全滅でした。「声がいいのでアナウンサーに挑戦したら?」と友人に勧められて、ここでも勘違い!(笑) 行き場が無くて、失意のどん底にいた時、アルバイトで紹介された方のお嬢さんが結婚でTBSのタイムキーパーを辞めるので、TBS音楽番組のタイムキーパーとして卒業後働くことになりました。

ところがそこでまた大いなる勘違い!(笑) 一分一秒を争うタイムキーパーの仕事なのに、私は計算が苦手な“あたり症”! 計算間違いをするわ、秒読みで突然頭が真っ白になって声が出なくなるわ、本当に番組のスタッフに迷惑をかけてばかり。番組自体は大好きでした。黛ジュンとスパイダースがレギュラーで当時人気絶頂のタイガースやテンパターズなどのグループサウンズが出演する「天使と野郎ども」という音楽番組だったので、活気に満ちて、その制作に携われることに毎日がワクワクドキドキしていました。スタッフもみんな優しく、失敗ばかりするドジタイムキーパーの私を守ってくれましたが、自分がみんなの足手まといになっていることと、この仕事は私に向いていないことが分かっていたので将来の不安も抱えていました。

—作詞の方に進まれるというのは、また次の出会いがあったのですか。

スタジオの隅で次の録画撮りの計算をしながら、なかなか数字が合わず半べそをかいている時に背中をトントンとたたか人がいました。その人は、当時飛び鳥を落とす勢いの作曲家のいずみたくさん。「恋の季節」が大ヒット中で、ピンキーとキラーズが出演する日だったのでスタ

ジオを見に来ていたのです。「タイムキーパーさん? この仕事好きですか?」と聞かれたので「嫌いです! 私、計算苦手なので向いてないんです!」と答えました。「じゃあ、あなたはどんな仕事をしたいの?」と聞かれたので、つい「作詞家になりたいのですが、先日、そのチャンスを逃したばかりです」「じゃあ、君、僕の事務所に来る? TBSを辞めて来る勇気があれば、僕が育ててあげよう」と言ってくれました。作詞の才能があるかどうかも分からない初めて会ったばかりの私に、なぜそんなことをいずみさんが言ってくれたのかいまだに不思議ですが、その申し出に「はい!」と即答。「今の君のTBSのギャラは出せないけど、最低保証額は3万円出してあげよう。それが十倍になるか何十倍になるかは、君の才能次第だけど」。当時、大卒の男子の初任給が2万2千円、私のギャラは7万円(国際線のスチュワーデスと同じ金額)でしたが迷いはありませんでした。そして半年後、大学を卒業した翌年春、いずみたくのオールスタッフ・プロダクションから「ヒロコ・ムトー」というペンネームで作詞家デビューしました。

デビュー曲は坂本九さんの「白いラブレター」と九重佑三子さんの「愛の世界」。その2曲がその年のNHK紅白歌合戦で歌われたので、作詞の仕事は順調に始まりました。「古賀政男賞」入賞曲の作詞を3年連続いただきましたが、全くのド素人作詞家としてはとてもラッキーで恵まれていたと思います。でも実は、私は譜面の読めない作詞家。随分危ない勘違いの綱渡り?を何度も経験しました。



作詞: 郷ひろみ「天使の詩」、九重佑三子「愛の世界」、坂本九「白いラブレター」、中村晃子「自由なかもめ」、ピンキーとキラーズ「青い森の二人」、藤ひろこ「この涙をあなたに」、ペギー葉山「雲よ風よ空よ」「秋よおまえなら」「白い風に乗って」「冒険コロポックル」挿入歌ほか
訳詩: ジョルジュ・ムスタキ「私の孤独」「ヒロシマ」「愛のシャンソン」ほか
ミュージカル: 「青いガラスとエメラルド」「白姫伝説」「ゴールド物語」「猫の遺言状」「幸せ猫」
著作: 「妻たちの海外駐在」「猫の遺言状」「野良猫ムーチョ」ほか

—校友のペギー葉山さんともお会いになりましたか。

もともとはTBSドラマ「時間ですよ」の挿入歌「雲よ風よ空よ」を若いグループが歌っていたのですが、ペギー葉山さんが気に入ってレコーディングしヒット曲となりました。それがご縁で「秋よ お前なら」とかアニメ「冒険コロポックル」のテーマソングなどを何曲も歌ってくださり、私のミュージカル作品などはよく観に来ていただきました。青学の大先輩。気さくでとても素敵なお方でした。

—作詞以外にも著作やミュージカルを書かれていますね。

アメリカ(1976年~1979年)から帰国して3年後に、「ミキ、アメリカに帰りたい」という本を講談社から出しました。長女を通して海外からの帰国子女問題を伝えたいからです。それからしばらくして女優の稲垣美穂子さんと出会い、彼女と一緒に子供のための創作ミュージカルを創るようになり、1985年春「青いガラスとエメラルド」、同年秋の芸術祭参加作品にもなった「白姫伝説」、2000年に文藝春秋社から出版した「猫の遺言状」を稲垣さんがテーマにしたいということで、「ゴールド物語」という黒猫を主人公としたミュージカルを書きました。ミュージカルのオープニングに森田あずみさんという画家の猫の絵を使い、森田さんの猫の絵に感動して詞を書

いたのが初めての絵本「野良猫ムーチョ」でした。

—「徹子の部屋」に出演されたのは?

大人になるまで猫が大嫌いでしたが、娘に切望されて猫を飼い始めて以来、猫ばかりといわれるくらい猫好きになってしまいました。猫の本を何冊も書きましたが、その中の「野良猫ムーチョ」が話題になって「徹子の部屋」に出演しました。その時、徹子さんが「野良猫ムーチョ」の朗読をする予定になっていましたが、本番当日徹子さんが「ムトーさんね、本は作者が読むのが一番伝わるのよ」と言って、突然、その場で私が朗読することになりました。それがきっかけで、講演の時に朗読をリクエストされたりして自分の絵本を朗読する機会が増えました。



—「神奈川県ボランティア活動奨励賞」を受賞されましたね。

1歳半で親の事情で海外へ行き、5歳で帰国した長女は、当時まだ珍しかった帰国子女ということで何をすることも目立ち、英語がしゃべれるということでいじめに遭いました。言葉の壁、異文化の波の中で必死に海外で順応しようとして生きてきた子どもが、母国で受け入れられずいじめに遭う。とても悲しいことでした。

娘たちがいじめを乗り越えて大人になった時、初めて「今、いじめに遭って悲しくつらい思いをしている子どもたちや親たちに、いじめに遭った子の親としての経験、娘たちの経験を通して克服の仕方を伝えたい」と思いました。それがきっかけで、いじめの克服と防止ということで朗読講演「心の宅急便」という活動を始めました。全国小中学校、高校も2007年から7年間、200校くらい回ったかな。シアトルにも2回行きました。

日本という国はある意味、個性とか目立つことに対して拒否反応があります。例えば、学食のテーブルにある白いコップの中に、ひとつだけ青いコップや赤いコップがあると排除するように。いじめは親にとっても、とてもつらく悲しい事。子どもを守るためには何でもやりました。仕事もその間休業し、学校のPTAの役員になって中からも見守ったり、いじめる子たちとかち合わない遠い塾を選んで車で毎日送り迎えしたり…。書く場所も訴える道も知ってはいたけれど、二次被害を受けないように、ただただ隠し守るしかできませんでした。

それでも自分で大金持ちだと思えるのは、財産としての友達がたくさんいたから。人生の岐路があるたびに、必ず手を差し伸べてくれる友人がいて、自分が思ってもいないことをいろいろできたなって思います。

■HP「心の宅急便」 <https://kokotaku.com>

(取材文: 編集長 松永 信一)